



母校の創立百周年を お祝いして

東京格致会会長 平田 耕司

私達の母校が本年十一月一日で創立百年を迎えます。百年にわたって人材を世に送り出してきた母校を誇りに思うと同時にその中の同窓の一人としてここに在ることを有難く思います。そして西暦二千年もあと二年余。百年とか千年という歴史のきざみの年に私達がいることは誠に幸運だといわねばなりません。

ところで私は東京格致会の運営をお預りしてから同窓会の在り方ということを考えてみました。同窓の皆さんはこの会に對しどのような事を望んでおられるのだろうか、また、どのような会になれば喜んで参加していただけるだろうかなどです。同窓会でなつかしい人に会えたとか、古里の最近の状況等が詳しく聞けたということもその一つでしょう。

私は過日、庄原実業高等学校同窓会東京支部総会の招待を受けて出席しました。庄原実業高校とわが格致高校は一九四九年(昭和二十四年)学校再編成により西城高校と共に統合されて広島県比婆西高等学校となり、一九五四年(昭和二十九年)に庄原高等学校と名称変更があつて、それが一九六一年(昭和三十六年)三月まで続き、その四月一日から再び分離して今日に到っていることはよく承知されている通りです。そのことから私達は親戚校としてお互いの支部総会には代表者を招待しているわけですが、今回も誠に盛大な会であつて、私と同年代の方や比婆西、庄原高校時代の

方も多く、そして話す内容が同じような体験や想いもあり、私達の同窓会の時と同じ感銘を受けました。これは古里が同じだから会話の中で共通した知人・友人の名前等も出て身近なつながりを感じるからだと思ひました。

東京格致会総会でも同年代だけでなく先輩や後輩と話していると、しばらく味わったことのない格別の心の安らぎを覚え、ふるさとを通して心のつながりが生れ、安心して話ができるのは同窓会だからです。古里の話はその古里の人と話すのがもつとも楽しい。毎年開催(後記の通り本年は十月四日)の東京格致会総会はそのことに意義があるように思ひます。また総会では折角の機会ですから各方面で活躍されている同窓の方から講演等を聞くことが出来ればという声もあり、今後はそうしたことも取り入れたらと考えています。

年一回の東京格致会総会はこのような考えを進めますので是非ご出席いただいで一緒に母校の百周年をお祝いし、また、楽しいひとときを味わっていただければ幸いです。

今私が住んでいる千葉県浦安市にも庄原格致高校の同窓の方が私の他三人おられることが解りました。近くの市川市や船橋市などを加えると更に増加いたします。いくつかその方々にもお会いして話したいものです。

今、世界は大きく変化しています。その新しい世界へ向けて私達の母校から更に多くの人材を送り出されることでしょう。その活躍を期待し、心からの声援を送らねばなりません。そして東京格致会は今後ともその卒業生を喜んでお迎えし、共に母校の

第 5 号

1997年9月

発行人・平田耕司
編集人・友広 寿

本号の内容

- ・平田耕司東京格致会会長のあいさつ
- ・寺川俊昭同窓会会長のメッセージ
- ・百周年を節目として―東 泰治校長
- ・入学試験の思い出―本田 守
- ・校歌感慨―長岡 格
- ・心に残る第1の故郷―立花榮 郎
- ・思い出雑感―須沢慎聰

- ・昏ルニ未ダ遠シ―八谷義彦
- ・日玉焼きを焼いたこと―藤高明
- ・大事にしたい同窓会―小山眞次郎
- ・同期会に想う―関口幸夫
- ・庄原格致高校の思い出―瀬尾明雄
- ・百周年募金のお願ひ

名誉を維持し、また、発展に助力いたしたいと思ひます。
また、東京格致会の各位におかれては、今後とも会に對し何分のご力添えを賜りますようお願いする次第です。(昭和二〇年卒)

後輩たちに励ましを

―母校の創立百周年を迎えて―

同窓会会長 寺川 俊昭

東京格致会の皆さま。懐しい東北の母校を巣だつて幾十年。首都圏に雄飛せられ、東京の地に新しい人生を築き、それぞれの地位を得て活躍なさっている皆さまに、心からの敬意を表します。学生時代を東京で過ごしたものの一人として、私も東京格致会には格別の親しさと近しさを感じておりますが、全国各地から志をいだいて人の集まる東京では、同郷の縁、同窓の縁は、格別の温かさと励ましを感じあうものとして、大切な意味をもつことが、折に触れてしきりに思われること

です。校名の格致のもとにある格物致知は、中国の古典にある古いことばです。しかし、天地の道理を知る智慧を磨こうということこのことばは、教育の理念としてはまことに素晴らしい、天下に誇つてよいものです。母校での懐しい学生生活と重なり合つて、この格致の精神にいつも新しい励ましを汲み取つて、それぞれの社会生活に力を尽くしていきたいと存じます。

さて、今年十一月、母校の創立百周年を迎え、全国から同窓生が母校に集まり、十

一月二日に盛大な記念の式典と行事を繰りひろげます。併せてその記念事業として、現在母校に学ぶ後輩たちのために、校庭に憩いの広場を造り、百周年の記念誌を編集し、分校を併せた卒業生名簿を作るなどの仕事を、役員・有志が心を合わせて進めております。

そのための経費五千万円を、全国の同窓の皆さまに呼びかけて、御協力・御寄付をお願いしております。幸い多くの同窓各位の積極的な御協力を頂いておりますが、大きな額ですから、尚一層の御支援を仰がなくてはなりません。

東京格致会の皆さまには、事情御賢察の上、母校のため、後輩のために、何卒絶大の御協力を賜りますよう、心から御願ひ申し上げる次第でございます。よろしく御願ひいたします。(昭和二〇年卒)

百周年を節目として

庄原格致高等学校長 東 泰治

東京格致会の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

同窓生の皆様には常日頃、母校発展のためにご支援、ご協力をいただいておりますことに對し、厚くお礼を申し上げますと共に同窓生(昭和31年卒)の一人として感謝申しあげます。

ご案内の通り本校は来たる十一月一日に目出度く創立百周年を迎えるわけであり、

現在、あらためて庄原格致高校のもつ歴史と伝統の重みを感じると共に、先輩諸兄のご活躍に敬意を表すものであります。

県北における本校の役割、地域社会の人々や先輩諸兄の熱い願いに対し、更に本校教育の充実発展のために私の果たさなければならぬ責務の重大さに身の引き締まる思いであります。

私達は、この百年の輝かしい歴史と伝統を継承し、更なる新しい歴史と伝統の創造に努めると共に、本校に学ぶ生徒に確かな学力を身につけさせ進路を保証することにより「庄原格致で学んでほんとに良かった」といえる生徒の育成に努めなければなりません。

現在、本校が抱えている課題も多々ありますが、活力があり、しかも地域から期待と信頼される学校づくりに向けて教職員一同努力いたしております。

本年も教科学力、生活学力、人権を大切にする感性の育成、クラブ活動の充実向上に向けて着実に取り組んでいくところであります。

今春四月卒業した生徒の進路状況は進学が九〇％(四年制大学四〇％、短大二〇％、専門学校等三〇％)、予備校が七％、就職が三％でありました。

概ね、進学が予備校を含め九五％、七％、就職が三％、五％というのがここ二、三年の傾向であります。

生徒達は一応勉学によく励んでいると評価できると思っております。

先般催された格致祭(文化祭)では、はじけるような若さと情熱と連帯感、そして自主性と創造性を生かした二日間の行事を、保護者、地域の多くの人達の来校をいただき盛大にそして、成功のうちに終えることができました。

また、クラブ活動の面においても、硬式野球・ラグビー・サッカー・ソフトテニス・バスケットボール等、県北ではどの種目においてもトップの成績で県大会に駒を進めました。

本校建学の精神である「格致致知」「質実剛健」は脈々と引き継がれております。

このような生徒の活動に報いるためにも更に教育条件の整備、充実のために努力いたす所存であります。

いよいよ来たる十一月一日に迫った創立百周年記念行事も私達は学校行事として、また、学校教育の一環と捉え、学校としてどんな形で参画し、何を教育価値として学ばせるか、教職員、生徒ともども、考えているところであります。

学校といたしまして、この百周年記念を大きな節目として更なる飛躍発展に向けて全力で取りくむ所存でありますので同窓生の皆様の一層のご指導、ご援助を賜りますようお願い申しあげます。

終りになりましたが東京格致会の皆様のご健勝と母校「庄原格致」の発展を祈念して、ごあいさついたします。
(昭和三十一年卒)

入学試験の思い出

昭和二十二年卒 本田 守

私は奇しくも昭和元年に小学校に入学し昭和六年に小学六年となり、全く昭和と共に歩んだ思い出であります。さて六年生ともなるとそろそろ先のことを考えなくてはなりません。田舎のこととて全く呑気に遊び回っております。

その年の夏休みころと記憶しますが、格致中学校の先生が家に訪ねて来られ、これからの時代は中学程度の教育は是非必要であると、縷々説明して行かれました。こちらの反応がないままに秋にはさらに二、三回の訪問を受けました。

当時の農村は大変な不況のどん底で中学に進む人が少なく、五〇人募集の定員を大きく割り込み、三ヶ町村立の公立格致中学校はまさに存続をかけた危機に陥ったようです。そんな中で先生方の生徒募集の姿は真剣そのものでした。当時笑

いごとのように眺めていましたが、今にして思えばそんな自分が恥ずかしい思いです。

ところで私は兄がすでに在学中のことでもあり、格致中学に進んだらどうだということ、中学進学が決まりました。小学校の男子児童四〇名中卒業時点で中学進学者は僅かに四名(内三名が格致)に過ぎませんでした。

昭和七年春小学校を卒業するといよいよ中学受験です。入学試験はないとのことと安心しておりましたが、当然のことながら面接はあるとのこと。何しろ全く勉強に無縁の私としては、何を聞かれるのかと大いに不安でした。

順番が回って来ていよいよ部屋に入ると試験官らしき人が数名並んでおられ、なにか足の震える思いでおりました。質問は家のごとく兄のことなど簡単でしたが、最後に「何故本校に来たか」との質問を受けました。

あれほど格致に会い来いと勧誘しながらこの場で「何故きたか」とは、まさに青天の霹靂。自分の意志はほとんどないまま中学進学となつた私には全く何と答えてよいか分からず、しばらく考えて「先生が来いと勧誘されたからです」と答えてしまいました。先生方も笑っておられました。私はまさに冷汗三斗、将来への希望も展望も持っていない自分の姿がなんと哀れでした。

しかし合格通知が来て中学一年生です。受験生四〇名、合格者四〇名で全員合格とのことでした。翌年は農村景気も立ち直りを見せ、高等小学校卒業者を二年生に編入することになり、一気に八〇名に膨れ上がり二クラスとなりました。このようにして無試験状態で入学した生徒たちですが、美しい自然と善良で純朴な人々の中に勉強するでもなく過ごした中学時代。現在の生徒さん達の凄まじいまでの勉学の姿を見るにつけ、自分たちの子供の時代との大きな違いを感じない訳にはいきません。

さて自分たちが歩んだ道は大きな時間のむだ使いであったのか、それともその中で得難い人生体験をしたのか、私は後者のほうの所謂学問とは別に教育のもう一本の柱であるべき徳育を体得したものと、自分を慰めながら往時のさまざまを回顧しておる次第です。

校歌感慨

昭和二十七年卒 長岡 格

今から十年以上も前になろうかと思うが、「東京格致会」の会合に一度出席したことがある。旧知にも会えるかと懐かしさに胸をふくらませ期待して出かけたのだが、顔見知りには会長の細川さんだけで他はウンと若い方々ばかりで一寸ガツカリした。配布して下さった資料を見てビックリした。何と校歌が吾々が親しんで歌った「北なる吉備の高原に……」とは違うのである。吾々が歌った校歌は〇〇歌(名称を

東京格致会役員構成 (平成9年現在)

監事	西谷光徳 (S46)	室伏孝 (S25)
会長	平田耕司 (S20)	坂井昌彦 (S24)
副会長	坂井昌彦 (S24)	酒井久幸 (S25)
幹事	友広寿 (S27)	長井美 (S15)
副幹事	兼利卓蔵 (S28)	塚本幸 (S19)
事務局	明賢 啓 (S20)	新見義明 (S23)
常任幹事	小島芳元 (S23)	宗国百英 (S32)
	金森裕雄 (S25)	
	加藤哲治 (S30)	
	渡利治博 (S31)	
	信清 治 (S31)	
	積山弘佳 (S35)	
	新七 (S35)	
	新七 (S42)	

忘れた」と称された二曲の中の一つになっている。

私が在校中何かの行事には必ず斉唱し、また毎年行われた三校（格致、三次、日影館）對抗陸上競技会の応援に青春の血をたぎらせた校歌は現在校歌ではなくなっているのである。全くの驚きと共にそれまでの格致会への胸のふくらみは忽ちに萎み、懐かしさは霧の如く消え去り砂を咬むような気持ちで退席した記憶がある。

終戦後二度も校名が変わったと聞く。その都度校歌も変えざるを得なかったであろうと理解出来なくもないが、どうも残念だ。私は格致から旧陸軍士官学校に進んだ。同校は七十年の伝統を誇りつつも終戦と共に消滅したが、校歌は今も残り、各種同窓の会の後には必ず先輩、後輩共に斉唱し同窓の絆をヒシヒシと感じ合うのである。

「寮歌祭」というのが東京日比谷公会堂で毎年開催される。旧制高等学校、各種旧制高専出身者がそれぞれの校歌、寮歌を壇上で腕を振り、声を渾らして斉唱する。中には八十歳を超える人もいる。共に同窓の絆を感じつ、老いた血をたぎらせて唱う姿は清々しく、歌う者、聞く者共にその情熱に酔い、互に称え合う情景は涙ぐましい程である。

単なるノスタルジーと言われるかも知れないが、校歌とは卒業生にとってこのようなものであって在校者だけのものではない。今更古いものに改めることは出来ないが、今後如何様な事態（校制変更等）にも「格致」の名を冠する限り今の校歌を変更しないでいただきたい。後輩に同様な思いはさせたくないと思う。

先日帰省の折、格致高校の校門前に立ち寄ったところ玄関入口の壁に「格物致知」の古い看板が掲げてあった。これは格致学院の卒業生でもある私の父が書いたもので一寸懐かしかった。校歌の変わった学校に対しては複雑な思いがあるが、母校は矢張り懐かしいと感じたのである。

心に残る第二の故郷

昭和十八年卒 立花 榮一郎

昭和十八年卒。戦前、戦中、戦後のあわただしい生活を送った世代です。

十数年前、所用で庄原に立寄る機会がありました。数名の同級生が再会の宴を開いてくれ、学生時代の思い出、現況報告等、楽しい一夜を過ごすことが出来ました。翌日、母校の伊達校長（同級生）の案内で七塚原牧場等、懐しい場所を見て廻りましたが、雪害による樹木の折損状況は目に余るものがありました。

在学中植林をし、その成育を願っていた私達にとっては、大きなショックでした。

また、上野池（当時、特に桜の咲く時期には立入禁止となっていた）にも足を運んでみましたが、完全に死の池となっており、その惨状には言葉もありませんでした。

東京生れの私にとって、十一年間過ごした広島県（本郷・福山・庄原・上下）は、心に残る故郷と申しましょうか。格中卒業後、東京に戻り、進学、兵役、復員、転職と、戦後の厳しい世の中を泳いで五十余年、その間、オイルショック、バブル、崩壊と、東京も大きく変わりました。今では環境整備等も進み、わが街を流れる多摩川も綺麗に保たれ、鮭の遡上も近いと言われるまでになっております。

第二の故郷である庄原地方が、一日も早く美しい姿に戻って欲しいと願うものがあります。

おわりに、戦火に、原爆の犠牲に、また、病魔に倒れた学友のご冥福と、東京格致会の皆様のご健勝をお祈り致し、摺筆させていただきます。

昭和二十年八月九日

・原爆に 友うばわれし 夏 暑し
・集う友 互に皺の 数ふえて

平成八年度「東京格致会・懇親会」報告

恒例の年度総会は一〇月一九日午後三時、芝公園のメルパック（郵便貯金会館）「白鳥の間」において開催された。

母校から東泰治校長（昭和三十一年卒）、寺川俊昭同窓会長（昭和二〇年卒）、四水薫同窓副会長（昭和一九年卒）をお迎えし、地元からも同窓四四名の参加を得て大いに盛り上がった。

東校長から母校の現況と力強い抱負、寺川会長から創立百周年に向けての事業計画のご報告をお聞きして、お待ちかね懇談会に入る。この間に実業高校の滑年雄支部長、清水虎夫支部長から楽しいご祝辞をいただいたり、各年度の代表から懐かしいスピーチで会場は沸いた。

今回は初参加の方もあり、女性会員も増えて執行部を喜ばせたが、会員総数からいえばまだまだで、女性男性を問わず老いも若きも奮って参加していただき、参加者数の記録を年ごとに伸ばしていきたい。

●記念写真のお名前は左記のとおり

（敬称略・左から右へ）

〔1列〕坂井・塚本・長井・田部・平田・東校長・寺川会長・滑（実業）・四水副会長

〔2列〕兼藤・須沢・椎名・佐近・北畑・河添・中村・齋藤・八谷・小田・清水（実業）・酒井・風呂田・新宅

〔3・4列〕西谷・近藤・友広・沼越・小島・百々・藤高・森沢・森戸・住本・木村・信清・渡辺（武・後）・渡辺（昭・前）・田中・山田・信永・寺本・生田・増山・積山・金森・加藤・明賀

（四七名）



思い出雑感

昭和二〇年卒 須沢 慎聡

芸備線をまたぐ陸橋を通って道の両側にある民家を少しばかり過ぎると右側に学校の正門があった。また広い運動場の北端には大きな松の林が連なり、北東の隅には武器庫があったと思うが記憶がいだらうか。遠い昔のことだから思い出の風景に自信がない。

第二次大戦の最中で敵国の大きな町を占領したと云っては提灯行列をし身辺は何かとぞわめいていたように思う。村の古老に「この戦争は負けるのではないか？」と云われ妙な気持ちで聞いたことを思い出している。それでも敗戦などということは正直考えもせず上の学校にあこがれて勉強をしたものだ。

そのうち、甲種飛行予科練習生に志願することになったが、体格検査で不合格になったことをよく覚えていて。学校の歴史は神洲不滅の皇国史観だから今のような自由な考え方は知るよしもない。進学して二年目頃に学徒動員となり繊維会社の工場で敵艦機銃掃射を三回四回受け、すぐに終戦になった。

復学してからの町の生活は「ひもじい」の一言に盡きる毎日であった。雑炊屋の前に長い行列をしたり、一合の米の粒は幾つあるか、ということまで友人と調べ寮の賄の人とやり合ったものである。当時は勿論就職難であり、左翼の強い学校は会社社に敬遠されたが運よくはまり込んで、東京の工場に赴任を命ぜられた。共産党員と工場組合幹部の跳梁に耐えながら日夜奮闘し戦災工場の復興に夢中で働いたものだ。

長い会社生活は階段を一步ずつ昇って行くことだったし、家族には迷惑をかけましたが、定年で毎日が日曜となり残り時間を数えるような年になると、もう少し賢明な

生き方ができたのではないかと思うのである。自分の不明の故に小さな世界で生きたのではないかなどと思っている。私共の時代と違って遥かに早いテンポで進む今の世だから、これからの人達は大変だなと思っているが反面羨ましくもある。もうやり直しはできない。

昏ルルニ未ダ遠シ

昭和二〇年卒 八谷 義登

昭和十六年に入学した格致中学校の思い出や当時の世相など、すべて東京格致会会報4号で、寺川俊昭 平田耕司 渡辺武臣の三氏が縷々述べているので、同級の私の出番はなくなつたようです。楽屋の日溜まりで隠居の繰り言でもこぼすことにいたします。

昭和二十七年三月、私が東京へ出て来てから今年で四十五年が過ぎました。広島から東京まで二十時間もかかった汽車も、今は「のぞみ」に乗れば三時間五十五分。当時その時間では、まだ姫路の手前をトコトコと黒煙をあげて走っていた筈です。早い。時の流れも同様、一陣の風に飛散して半世紀は束の間です。私も六十八歳、母親の逝つた年齢になりました。

しかし、未だ未だやりたい事が充分ありますし、平均寿命の下降に悼さすのは世人の響を買いそうです。定年退職して年金生活。諸事から解放されて安堵したら、強い寂寥感から一筋に、行きつく先はアルツハイマー。惨めです。未だ正気のまま二十一世紀の住み心地を満喫して当分の間は長生きをすることにいたします。

「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」という恰好の言葉があります。残つた日を数えながら珠数をまさぐる隠居仕事ではありません。日長の季節は、太陽が西に傾いても強い西日が完全に沈むまでは相当の時刻があります。一仕事、二仕事できそうです。

五十の手習いと言いますが、私も五十歳にして油絵を始めました。趣味でやることですから、気楽に師匠にもつかず独習です。近頃は初歩から専門書まで絵の参考書は充分にありますから、不自由はいりません。銀座へ行けば画廊がたくさんありますから、無料で勉強できます。始めてから十八年経ちました。年に一度の公募展で、搬入、搬出や観賞で上野の美術館へ通うのが継続する励みになったのだと思います。

「昏ルルニ未ダ遠シ」です。四月に、あるデパートで初めての油絵個展を開きました。好評を頂き先ず先ずの成功でしたから、来年は第2回をやりたいものです。三十数点の風景画を描くには、取材の日数を入れて一年近くは必要ですから、よりの確な目標と希望が出来ました。老練した隠居の繰り言ではなくなりました。忙がしくなりました。

老という字は、八十・九十の年齢で、碌は役に立たないという意味らしいので、碌碌までも「未ダ遠シ」です。そのように強がりも言っても、還暦を過ぎた頃から、田舎の事や中学生時代の事どもが懐かしくなつて来るものです。東京とその近郊へ在住の格致中学校、同高等学校同窓の人達は八百人以上と聞いています。毎回の総会出席者は十五分の一か二十分の一と少数の人達という事が近年の事実のようです。交通が至便になり速度も超高速になつた現代でも、田舎へ帰省する機会はず少く限られています。年一回の東京格致会へ、もっと沢山の同窓の人達が集まつて「昏ルルニ未ダ遠シ」日日の事や田舎の情報など四方山話を語りあいたいものと常々思っています。

もちろん、高年の懐古談ばかりではなく、現役の中天に燦然と輝く若い人達の活気に満ちた話も満喫したいものです。「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」私たちの貴重な良薬になりますから。「昏ルルニ未ダ遠シ」

目玉焼きを焼いたこと

昭和二十七年卒 藤高 明

ことしの梅雨どきの異常高温で、思い出したことがある。車のボンネットが目玉焼きを焼いた光景だ。かれこれ三十年前、インドに駐在していたときの話である。

インドというと、南の国という印象だが、意外に北にある。地図で調べたことはないが、私が住んでいた首都ニューデリーは、緯度の上では、おそらく沖繩か、あるいはもっと北にあるはずだ。それなのに、おそろしく暑いのは、内陸性気候というやつだ。五月から七月にかけて、オーブンに入れたような日が続く。

いまのように、エアコンがあるわけではない。天井で飛行機のプロペラのような扇風機がゆっくり回っているだけだ。多少ひんやりしてくる深夜、新聞記者仲間と酒を飲むのが唯一の楽しみだが、「すかつとさわやかな」ビールなんてものはない。砂糖キビから作つたラムに、山盛りにしたライムをしぼり込んで飲む位だ。よくしたもので、夏の間は、新聞のネタはばつたりと絶える。これまでも何度かあった印パ戦争もはじまるのは冬で、猛暑がやってくる三月までは片づく。

ある夜、ボンネットが目玉焼きが焼けるかどうかで議論になった。焼けるというやつ、焼けないというやつが半々。賭けになった。私は確か「焼ける派」だった。何を賭けたかは記憶はさだかでないが、せいぜいラム一本か二本といったところだったろう。翌日、実験が行われた。気温が最高になる正午すぎ、わが家に集合、車庫から愛車を引き出した。アンパサダーというインドの国産車で、車体はすべて厚い鋼板でできている。直射日光にさらされると、車体はたちまち高温になる。一時間位たつてから食用油

をたん念にぬる。香ばしいにおいがする。そしておもむろに、タマゴを落とす。たしか「じゅつ」という音がした。

結論をいうと、白味がやや白濁した程度で、とても焼けたというものじゃなかった。三年たつて、日本へ呼び返された。次の住地は沖繩だった。

(朝日新聞社・元企画報道室長)

大事にしたい同窓会

昭和二十七年卒 小山 眞次郎

故郷の庄原を離れて早や四十五年、昭和二十七年に卒業して上京、警視庁に勤務し、四十年余の勤めを終え、現在は城東地区の自動車学校で初心運転者の養成に汗を流しております。

還暦を過ぎて四年、気持のうえではまだまだ若いと思つていても、社内のゴルフコンペに参加すると飛距離は出ないし、ラウンドの後半にはバテ気味となり、「こんな筈ではなかった」と思うが体力の衰えはいかんともしがたいと観念しているこの頃であります。

歳を重ねて思い出すのが故郷の山河。格致中学から高校の六年間、毎朝勝光山の雄姿を眺めながら通学したあの頃が大変懐かしく思い出されます。中国山地の山ふところであつた皆様方も同じ思いだろうと推察します。

皆様方も各年次ごとの同窓会を開催されていると思いますが、小生達も遅ればせながら平成五年から全国規模で開催しております。平成三年九月に庄原地区の遠藤賢君が幹事となり庄原地区同窓会を開催し、比和町で一泊し吾妻山に登りました。約二十名(東京三名)が参加したのですが、四十年振りには逢う者が多く、本当に懐かしく楽しい二日間を過ごしました。その時「定期的に全国規模で開催しよう」ということになり、平成五年から、広島、大阪、東京の各

地区が順番に幹事となり開催しております。今年第四回目宮島で開催される予定です。

初回は平成五年に広島で開催され、六十数名の懐かしい顔ぶれに出逢うことができ、そのうち半数は四十年ぶりの再会でした。懐かしさで胸が一杯となり、昔のことを語り合い、旧友は良いものだなあ、とつくづく感じたひと時でした。その時の幹事が佐伯君(旧今田)で「二年後は京都で逢おう」と言つて別れたのですが、一週間後に心筋梗塞で死亡されたとの訃報に接し、人の命のはかなさを身に沁みて感じた次第です。彼とは一年B組で一緒に勉強した仲で誠に残念であります。心から冥福をお祈りいたします。

四月十九日、庄原市立実留小学校の同窓会に参加してきました。学校創立百五年と新校舎落成を記念して開催されたのですが、参加者は二三〇名、うち小生の同級生は十六名が参加しておりました。昭和二十一年卒業以来五十年ぶりに逢つた者も居り、子供の時に呼んでいた「〇〇ちゃん」と呼び合い、同級生全員で二次会までやり語り明かしました。「幼馴染みの思い出は青いメロンの味がする」との歌の文句がありますが、還暦を過ぎてメロンの皮は赤茶けて皺くちやになつていても、味は酸っぱく新鮮でありました。

同級生というものは、学校を卒業してそれぞれが別の道を歩んできても、四十年、五十年ぶりに逢えばたちまちタイムスリッパをして当時のことが鮮明に思い出され、気も心も若返るように思えるから不思議です。

「年をとれば子供に還る」といわれるが、旧友や幼馴染との再会は楽しく美しいものであります。今後も健康に留意しながら、このような機会にはできるだけ出席して旧交を温めていきたいと思うこの頃であります。

同期会に想う

昭和三〇年卒 関口幸男

去る五月十日、東京駅近くの某レストランで同期会が開かれた。

庄原高校昭和三〇年卒の女性四人を含む一五人の顔ぶれだ。上京以来しょっちゅう会つている者(何年か前までは会つていた者)もいるが、卒業以来初めて顔を合わせ同期生も何人かいた。

最初のうちは誰だか皆自分からずにとまどつたが、それもそのはず、四十年以上もその時が流れているのだ。酒もすすみ、いつきに高校時代にタイムトラベルして話はずむうちに「ああ、あの蒼白い顔をして、おつとりした感じの生徒だったのがおまえか」といつたしだい。いまは色浅黒く、おつとりした面影をとどめてはいるものの、一見いかにも精悍な男になっている。

いくら時のへだたりがあろうと、たちまち俺、おまえで呼び合えるようになるのも高校時代に時間と空間をとものにできたおかげというものだろう。

高校時代といえ、それぞれの今ある自分の姿の原点がそこにある者も大勢いるにちがいない。私事で恐縮だが、よくよく考えてみると、結果論的にそういうことなのだ。とりわけ尊敬する先生が二人いた。一年生のころ将来は、口はばつたが化学者になろうという明確な夢をいだいたが、この夢は夏休み以降にもろくも砕け散つてしまった。

あとは三十歳ぐらゐまで若さにまかせて成り行きしだいでやってきたような気がする。だが、時間を拘束され、自分のためにもならない仕事をこなす生業には決してなじめず、翻訳稼業にはいつて現在にいたっている。偶然のようであらうではない。いまでも忘れないが、二年生の英語の時間にあてがわれた副読本(イギリス作家のポリーズ)や、その後自分で求めたミル

ンなどの作品群がその伏線となつていて、これは間違いない。したがって庄原高校でG先生の教授を受けていなかったら、いまの自分はいないということだ。G先生にはいつまでご健健であられますように！

そして歌の文句ではないけれど「道はそれぞれ違つても、クラス仲間はいつまでも」である！

庄原格致高校の思い出

昭和四〇年卒 瀬尾 明雄

高等学校を卒業し、故郷の庄原を離れてから、あらためて数えてみますと三十年を超えています。今でも年に一回位は帰郷しますが、学校は遠くから見ただけです。

私たちの学年の最大の特徴は、今の学校敷地に再建された真新しい学校、校舎へ入学したことです。校舎は木造二階建てですが、最後の新築木造校舎と言われているように思います。以後、県立高校の校舎は全て鉄筋コンクリート製になつたと思えます。学校設備は入学の四月には完成しておらず、校庭も整備中で、ブルドーザーを横目に見ての登校でした。

生徒全員で、校庭周囲の整備用に、西城川に玉石採取に行きました。小型トラックで持ち帰り、校庭周囲の整備に使った記憶があります。体育館の建設も始まり、順次建物の整備が進みました。一方新しい学校に、先生方も非常に張り切つておられ、学校運営等にいろいろな工夫をされたようです。まさに、私たちは、学校と一緒に成長していったように思います。

私たちの世代は、団魂の世代です。当時は経済高度成長が進み、高校への進学率も高まり、高等学校の拡充も行われた時代でした。次第に大学進学希望者も増えていきました。

私は、平均的な農家の次男に生まれ育ちました。高校までは進学させてもらえませんが、

大学に行くことは全く予想していませんでした。高校卒業後は、都会の工場に職を求めることが一般的で、工業高校に進学するつもりでした。ところが、中学三年三学期になって、この気持ちを变え、大学進学を前提として庄原格致高校普通科を選択しました。進路選択には、両親と隣家の観音寺の住職で庄原格致高校の教師であった世応先生の適切な助言を頂いたからです。

高校入学後は、周囲の雰囲気にも引かれ、よく勉強したと今でも思います。あのとき高校選択が、その後の自分の歩んだ道への入り口だったように思われます。

創立百周年記念事業 《募金》のお願い

会長 平田 耕司

同窓会本部では、本年十一月に挙行される母校創立百周年行事にもなつて、いくつかの事業を企画して全国の同窓各位に援助の呼びかけを展開中です。

ご存知のように、募金は一口五〇〇〇円で二口以上となっております。わが東京格致会でも趣旨に賛同して、会として一〇万円、そして個人でも五月現在一六〇人以上の会員が母校本部事務局に提出しておられ、大変感謝されております。

しかしながら先般、募金状況を本部に問い合わせたところ、いまだ設定目標額に到達していないと、さらなる援助を要請されました。

東京格致会のメンバーは約八〇〇名ですが、募金の案内がもれたりしてご存じなかつた方がおられるようにも聞いております。現在でも母校では秋に向けて懸命の募金活動を継続中です。

会員各位には、どうぞ母校のために、もうひと踏ん張りのご協力を賜りたく、ここに重ねてお願い申し上げます。

〔送り先（郵便振込み先）〕
（口座番号）〇二二〇〇一七四四三〇〇
（加入者名）庄原格致高校創立百周年記念事業実行委員会

平成九年度総会の御案内

本年度東京格致会総会・懇談会を左記により開催致します。万障お繰合せの上、是非共出席下さいますようお願い申し上げます。どうか旧友・知己をお誘い合わせて、多数ご参加下さいますようお願い致します。なお、準備の都合上、お手数ながら九月二〇日まで同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

平成九年八月
東京格致会会長 平田耕司

（記）

- 一、期 日 平成九年十月四日（土）
午後二時より
- 二、場 所 山 水 楼
千代田区丸の内三一一一
国際（帝劇）ビル2F
〇三一一三二二一三四〇一
- 三、会 費 総会費 八、〇〇〇円
年会費 二、〇〇〇円
学生 三、〇〇〇円



基金「本会運営基金」の報告

基金については、会報第一号にも掲載しました「趣意書」の中に「無償の株主、一口一万円・締切り設けず」とありますが、会員の皆様へのPR不足も懸念しております。平成九年七月三十一日現在六六名の方々（芳名は左記）のご賛同を得まして、多額の拠金が集まっております。

基金を拠出頂いた方々には感謝します。担当者としてはこれから情報を収集して適切なPRに努めたいと思っております。

何卒、会員の皆様各年次でクラス会等も行われると思いますが、その際は必ず「基金・年会費」を話題の一つに選んでいただき、大きな輪に育てるよう是非ご協力下さいませようお願いします。ご報告いたします。

〔基金出資者「芳名」〕（平成九年九月現在）

高尾田藤麻横室酒小金市森坂新等小井名沼新渡秋八五足平塚藤三細長田水	野野辺谷野山伏井林森岡戸井見岡島上越越見辺山谷風立本岡玉川井部井	美寿良博恵勲孝久木裕四昭昌義良芳隆教達義武幾義三耕幸富謙一幸	代子武美子雄一幸雄雄象大彦明治元行之也和臣郎登郎勇司三薫之助	昭大 8
26 26 26 26 25 25 25 25 25 24 24 23 23 23 23 22 22 20 20 20 20 20 19 17 17 16 15 10				
本田新井守瀬江八積谷黒梅河森宗加増明村榮近兼濤奥石本岡藤昌田友実岡掛	間端宅上長尾角谷山岡田木添沢国藤山賀主藤利合平飛倉山高田友兼原昭	ます山和明幹英弘正香代崇哲哲宏恭敏正卓宏博圭康哲喜美登	ます山和明幹英弘正香代崇哲哲宏恭敏正卓宏博圭康哲喜美登	昭造 26
49 43 42 41 41 40 36 35 35 35 34 34 33 33 32 32 30 30 29 29 28 28 28 28 27 27 27 27 26				

〔編集後記〕

◇東京格致会会員の皆様もご承知の通り母校の百周年記念行事が今年11月2日（日）に行われますが、皆様のお手許に寄付金についてお願いが届いていると思えます。今日の「己」は格致・比婆西にて人間としての基礎を確立したからとの思いを込めて、未だ振込みをなされてない方は期日も迫っていますので可及的速やかにお願い致します。

◇次に本会は今年度の会員名簿を最新の情報を蒐集して発行の準備中でございます。価格一部一、〇〇〇円の予定です。多くの会員の方にお求めいただいで、出身地、年齢別といった縦横の関係を深めていただきたいものと考えております。

◇今回の会報の出来栄はいかがですか。大変勇気づけられる内容の文章もあり、皆様も奮起され目標を持たれた事と思います。総会には是非出席していただき、諸先輩のご努力ご苦心のプロセス等についてお話を聞いたり、ご教示していただき、心を豊かにしたいものと思っております。

◇次回の会報の原稿について、今の世相は政・財・官・民ともに心の凍るほど人間としての質が低下し秩序が乱れているのを如何お考えでしょうか、または迫り来る二〇〇〇年等についての原稿をお願いしたいと思いますのでよろしくご寄稿ください。

（T）

「東京格致会会報」第五号

平成九年九月一日 発行
 発行人 平田耕司
 編集人 友広 寿
 事務所 東京都千代田区神田淡路町一丁目一四
 酒井会計事務所内
 電話 三三三二五五 八九九五
 連絡所 東京格致会区東大泉七丁目一八
 友広 寿
 電話 三三三二五五 四二二五
 （振込口座）
 ◎駐金 郵便振替 一五七七一七二九五
 東京格致会